

17 『重訂解体新書』所引の『医学原始』 について

陶 惠寧

一八二六年に刊行された西洋医学の解剖訳書『重訂解体新書』（二巻、大槻玄沢訳）の附録篇には、本文を説明する参考書として数多くの中国書籍、特に医学書が使用された。その中で引用の頻度がいちばん多いのが『医学原始』である。ここでは『医学原始』の著者王宏翰と『医学原始』とについて考察した結果を報告する。

一、著者王宏翰（?～一七〇〇）は清代医家である。王宏翰は天主教教徒で、よく西洋宣教師と一緒に洋学（西洋医学）を検討を行い、西洋の四元素説と中国の五行説とがよく似ていると思ひ、結びつけようと考へている。中国近代医学史では西洋医学を受け入れた第一人者として認められている。

彼の中西結合思想は一六八八年に刊行された『医学原

始』に反映されている。しかし、所引の西洋医学をみると、王宏翰は解剖学をあまり重視していなかったと言える。彼の興味は西洋医学の性理（生理を含む）の四体液（四元論）、感覚運動論、記憶、呼吸、夢論などにあった。

二、『重訂解体新書』所引の『医学原始』

原本の残存状況は、本書の評価がいかなる状況にあったかを示すものであるが、『医学原始』原本は、中国の近年來の調査によると、大型漢方医書の目録書『全国中医聯合図書目録』に収録されていない。中華医学会上海分会図書館に一部（四巻、清・康熙三十一年刊）あるだけである。日本では内閣文庫に江戸時代の江戸写本『医学原始』が収蔵されている。しかし、『医学原始』に対する研究、特に『医学原始』の日本への影響に関する研究は日中ともほとんど行われていない。

『重訂解体新書』に所引された『医学原始』は、二巻の「四元行論」、「紅液黄液」、「黒液」、「白液」、「脈経之血由心煉」、「動寬至細之力徳」、「知覺外官総論」、「目之視官」、「耳之聴官」、「鼻之嗅官」、「口之味官」、「身之触官」、「澁記司」、「嘘吸論」など計二十数カ所である。こ

の引用文から大槻玄沢の引用書籍の選択方針、見方がいかなるものであったか次の3点にまとめることができると見ている。

① 『医学原始』の重視・玄沢は『医学原始』について「漢有医道以降。三千年。医人之多。医書之夥。無一不涉陰陽五行者。而其說頗系実測者。僅此書与明方氏所著耳。」と記す。『重訂解体新書』に引用された書籍は二十種類以上に及ぶが、その中で、最も多く引用しているのは『医学原始』で、次が方以智の『物理小識』である。この二書は二百年前。先我所発而其得実者。不為不多矣。然本所取于重訳。而非直就彼書訳之者。則未免隔一層而觀焉。今就其中。抄出其差可徵本編者若干条。以引用焉。」と評価し、さらに「蓋本西説。而合旧記与自見。而為説也。」其説未為全尽。然原出于西説。学者參勘之可也。」と見ている。

② 西洋医学の引用…中国書籍から玄沢が引用した文章は漢方と西洋医学ともにあるが、西洋医学の方が多い。凡方(以智)王(宏翰)二氏所説。則蓋伝西説而所述。「按是実測正説」、「此得実之説」と評価しているが、これ

から大槻玄沢が実測に基づく西洋医学を重視していたことはわかる。これは『重訂解体新書』が西洋解剖学の翻訳書であることに関係あると思う。

③ 漢方医学の批判・王宏翰は『医学原始』で『黄帝内経』から伝承された中国医学と西洋医学知識を合体させたが、大槻玄沢は西洋医学からみて合理的でない部分は大槻玄沢が否定している。例えば、王の「耳為聞之具。腎氣通于耳」に対して、「王氏未脱旧染色。耳何関于腎哉」と否定した。又、説明が不十分な部分には「可惜也」と記す。例えば、心について、「惜哉未盡其詳也」と記す。鼻についても「此亦伝西説而所記也。然語而不詳。可惜也」と指摘している。

(順天堂大学医学部医史学研究室)